



## 受け身では終わらない研修

新潟大学医歯学総合病院

(済生会新潟県央基幹病院 研修中)

高橋 卓也

私は、新潟大学医歯学総合病院にて初期臨床研修2年目をしています。研修開始当初、私は新潟という土地に初めて足を踏み入れ、右も左も分からない状態でした。病院の広さ、診療のスピード、周囲の先生方の知識量。自分がここで本当に通用するのか、不安の方が期待よりも大きかったことを覚えています。学生時代とは異なり、自分の判断や行動がそのまま患者さんの診療に関わるという責任の重さに、戸惑いを感じる場面も少なくありませんでした。

しかし研修を重ねる中で、大学病院ならではの強みが見えてきました。それは「人とのつながりの広さ」です。新潟県全域から集まる医師の先生方と出会い、診療や進路について率直に相談できる環境があります。専門もキャリアも異なる多様な先生方と接する中で、自分の世界が広がっていく感覚がありました。大学病院は一つの施設でありながら、新潟という地域全体とつながるハブのような役割を果たしているのだと感じています。

特に印象的なのは、指導医の先生方の姿勢です。やる気を示せば、想像以上に多くの経験を任せてくださいます。大学病院は高度医療を担う場であり、重症例や稀少疾患に触れる機会も少なくありません。時に自分の力不足を痛感し、立ち止まりそうになることもあります。それでも「やってみるか」と背中を押してもらえる環境がある。その空気があるからこそ、自分たち研修医も受け身で

いられないと感じ、定期的に勉強会を開き、知識を補い合ってきました。診療の合間に症例を振り返り、疑問点を共有することで、個人では見落としてしまう視点を補うことができたと感じています。与えられるのを待つのではなく、自ら取りに行く姿勢が求められる場所だと実感しています。

医師として成長を感じた瞬間は、救急外来での出来事でした。診察後、患者さんから「話を聞いてもらっただけで気持ちが楽になりました」と言われました。高度な治療をしたわけではありません。ただ目の前の不安に向き合い、耳を傾けただけでした。その一言を聞いたとき、自分は初めて「医師としてここに立っている」と実感しました。医療は技術だけでは完結しない。人と向き合う営みなのだと、身をもって教えられた瞬間でした。

研修前、明確な理想の医師像はありませんでした。しかし、臨床に専念する先生、研究に打ち込む先生、地域医療を支える先生など、多様なキャリアを歩む姿を間近で見ると、自分の将来像を具体的に描けるようになりました。大学病院は、何もなくても時間は過ぎていきます。しかし、挑戦しようとするほどどこまでも機会を与えてくれる場所でもあります。その環境を生かせるかどうかは、自分次第です。

受け身のまま終わるのではなく、自ら動き、問いを持ち続ける医師でありたい。そう心に決めながら、日々の診療に向き合っています。